

Title	一在日韓国人の軌跡：65年の在日生活の聞き書き
Sub Title	Life of a Korean resident in Japan
Author	小松, 隆二
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1986
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.78, No.6 (1986. 2) ,p.720(72)- 734(86)
JaLC DOI	10.14991/001.19860201-0072
Abstract	
Notes	中鉢正美教授退任記念特集号
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19860201-0072">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19860201-0072</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 一 在日韓国人の軌跡

——65年の在日生活の聞き書き——

小 松 隆 二

## はじめに

在日韓国人・朝鮮人がどのようにして祖国をあとにし、日本にやってきたのか。そして日本でどのような生活を強いられたのか。とくに日本で祖国の独立運動・解放運動など社会運動・思想運動にかかわるような場合、どのような反発・抑圧をうけたのか。

在日韓国人・朝鮮人にかんする研究は決して少なくはない。しかし、このような諸問題について個々の事例に即して具体的に調査・研究した例はそうみられない。在日韓国人・朝鮮人の来日の方法・事情、さらに来日後の生活等はきわめて多様である。簡単に1つに集約することはできない。ただ強制的に連行されて来日した場合も、そうでない場合も、日本資本主義の支配と強圧の下でそうせざるをえなかったこと、けっして望んで積極的にそうしたのではなかったことでは、いずれも共通している。

本稿は、社会運動にもかかわった一在日韓国人の60年を超える日本における足跡をたどることによって、そのような在日韓国人・朝鮮人の来日からその後の生活や労働、さらには社会的活動の実態を総合的に明らかにする研究への一助とする狙いをもっている。

ここで取りあげる人物は、韓暎相（ハン・ヒョンサン）氏（以下では、氏をふくめ、すべての登場人物の敬称を略させて頂く）。1919（大正8年）年に初来日以来、時々の帰国・外遊を除いても、60年を優に超える在日生活の体験者である。氏の場合は、表面的には自発的に来日したケースである。しかし、その場合でも、日本資本主義の支配と強圧によって祖国での自由で希望のもてる生活や勉学の機会・夢が奪われていた事情を背後にもつ来日であったことも看過されてはならない。来日してからは、労働しつつ勉学したり、牧師としてキリスト教の伝道活動に従事したり、出版社や医療機関に就労して生活をたてたり、また要視察人になるほどにいくつかの社会運動団体に関係したりした。その結果、大事件にまきこまれたり、獄につながれることもあった。現在85歳になるが、なお健在である。本稿は、主に氏からの聴取をもとにまとめられた記録である。氏の健康上の理由もあって、

十分につきつめえない部分、深めえない部分が残ったが、1個の重要な事例としてあえて紹介することにした。

## 1 朝鮮の青少年時代——三一運動前後——

### 1

韓暎相が祖国をあとにして日本にやってきたのは、1919(大正8)年8月。日本の植民地支配に抗議し、独立を訴える三一運動(万歳事件)による挫折を契機にしての来日であった。その時から今日までの60数年間、前半の25年間は支配する側の日本の中で、植民地化される側の無権利の一市民として、つねに重圧に堪えながら生息する。後半の40年間は韓国籍のまま日本在留を続ける在日韓国人として、独立した韓国と日本のはざまにあって、相変わらず恵まれぬ環境の下での生活を強いられる。

このような戦前・戦後を通じる日本における氏の足跡は、在日韓国人・朝鮮人のうち、インテリゲンチァのそれを代表するものとして、また社会運動にかかわった先駆者の例として、興味つきない事例を提供してくれる。それは、差別をうける側にいる人間がまともに生きようとすると、巨大な権力の壁を前にして、いかに苦しい生活に直面しなければならなかったかをよく示してくれる。同時に、それは差別する側であった日本人の責任の問題をも露呈し、われわれ一人一人の考え・対応をも問いかけるものとなるであろう。

### 2

韓暎相は1900年5月8日、全羅南道靈岩郡靈岩面校洞里で生れた。父韓東洙、母河卿玉の4男(7人兄弟)であった。

靈岩面で普通学校(小学校)を卒業したのち、京城(現在ソウル特別市)に出て中央学校(旧制中学校)に入学。1918年3月、中央学校を卒業。中央学校在学中に2つの大きな出来事を体験する。1つは3年生のとき、メソジスト教会で洗礼をうけたこと、もう1つは4年の3学期、卒業直前に曹英玉と結婚したことである。

中央学校在学中は、文学を専攻する希望をもっていた。しかし文学では生活がたたないと、キリスト教にも魅かれていたので、結局神学校に進み、牧師になる決意を固めた。そのため、中央学校を卒業してから、神学校入学のためソウルにとどまって予備校に通うことになった。予備校に入ってから、加藤一夫らが企画したトルストイ全集(春秋社)など文学書を購読し、強い衝撃をうけたりする。そのため、神学校をめざしながら、なお文学に魅かれる気持も払拭しえないでいた。

三一運動にまきこまれたのは、この予備校時代であった。まだ当時の事態は正確にはのみこめな

かったが、日本の強権的支配によって抑圧される側の不満、独立への希求は自分なりに理解できたし、先輩たちが真剣に何かを画策し動きまわっていること、とくに3月1日の決起前後のあわただしい動きには、知らず知らずのうちにひきこまれていった。

まだ19歳の彼がかかわったのは、集会等の伝達・呼びかけや自らも集会に参加する程度の下っぱの仕事であった。それだけに、取締当局への警戒心も弱く、3月3日にデモに加わろうとして、あつけなく検挙されてしまう。

連行された本町警察の留置場は検挙された同胞であふれていた。ほとんどが学生や若者であった。廊下まで、数珠つなぎにされた若者で一杯で、韓も廊下によくわずかの場所を占めることができる状態であった。その後半年も続くこの運動が、アジアの植民地解放運動の先がけとなり、総検挙者数が5万人を超えるほどの規模になることは、この3月3日段階でも下っぱの1参加者にもよく想像できる動きであった。

取調の結果、韓が予備校生でもあり、下働き程度の役割だったことはすぐにわかり、3月末に厳重説諭で釈放された。しかし、この事件を機に、植民地体制下に自らのおかれた屈辱的な地位を身をもって教えられ、社会的にも大きく目を開かれる。その点で、長い人生において意識した生活への転換の契機になった事件として、この三一運動は、朝鮮人全体にとっても、また韓自身にとっても忘れることのできない出来事となった。

### 3

京城で検挙、そして釈放の後、韓は予備校には戻らず、いったん郷里に帰った。郷里に帰っても、学校にでも通わない限り、やることはそうなかった。朝鮮経済は日本に従属化され、その自立的発展を阻害されていたので、若者には生活を保障してくれるまともな仕事口はほとんどなかったからである。この状態を根本からくつがえして新しい社会に変えるか、さもなくばそこを抜け出すかしない限り、若者には希望も夢もないというのが当時の朝鮮の実情であった。

郷里で、韓は、父から「まだ若いうちから社会運動や反日運動にうちこんでも仕方がない。しっかり勉強した上ではじめてそういったことも考えるように」と忠告された。そこで、韓は思いきり日本に渡って出直す決意を固めた。この決意にいたるには、朝鮮の実情や父の忠告に加えて、中学校や予備校時代に、読書を通じて知ったトルストイアンで、民衆芸術運動のリーダーであった加藤一夫や無我愛運動の伊藤証信に近づきたい気持をひそかに抱いていたことも大きな支えになっていた。のちに日本で知りあう金重漢も、在鮮時代から加藤一夫に憧れていたのと同様であった。

このように、1919年という年は、韓にとっては、短い期間のうちに、大きな出来事があいつぐ激動の年となった。とうとう日本に渡るところまでできてしまったのである。

2 日本における最初の生活——1919～1921年——

1

1919年8月下旬、韓は釜山から船で日本に渡った。最初に足跡をしるした日本の土地は下関であった。妻は祖国に残したままで、単身の来日であった。

すぐに東京にでて、友人宅に身を寄せた。日本の様子になれたら、生活の資を得るために仕事口を探し、同時にどこか学校に入学できればと考えていた。

しかし予定通りには事がすすまなかった。考えが甘すぎたことはすぐに思い知らされた。早々に友人に「お前の日本語は何をいっているかわからない。それでは用も足りんから、まず日本語をきちんと勉強するように」と注意をうけたのである。そこで、2、3か月、日本人の家庭に入って日本語を勉強することに計画をたて変えた。

その時思いついたのが伊藤証信を訪ねることであった。前に『雄弁』誌上で、伊藤が京都から東京に出て新しい活動に着手するといったインタビュー記事を読んでいたの、いつかは訪ねるつもりであった。日本人にはほとんど知己はいなかったのと、怖いもの知らずとで、日本語での行きづまりを機に、誰の紹介もなしに、いきなり伊藤を訪ねることにした。

当時、伊藤は東京・神田神保町の東京堂の近くで精神運動社を構えていた。機関誌の『精神運動』は多くの協力者をえて、評判が悪くはなかった。この無我愛運動の継続の傍ら、伊藤夫妻はミルクホールも経営していた。そう広くない2階家であったが、主の伊藤たちは2階に居住し、1階がそのミルクホールにあてられた。夫人のあさ子が社交的で、ミルクホールをうまくきりもりし、また運動関係者の来客もうまくこなしていた。

その家を訪ねた韓が初対面からいきなり居候を申込むと、いとも簡単にお許しがでた。韓は予想以上にさい先のよいスタートに喜んだが、考えてみると、60年を超える在日生活では、随分多くの日本人にめんどろをみてもらったのを思いだす。その最初が伊藤であった。もちろん差別や蔑視もうけたが、同時にある日本人たちはよき隣人として理解や協力の手を差しのべてくれたのも事実であった。

ともあれ、早速伊藤の家に居候の身になり、そこを足場に日本生活を始めることになった。もっとも居候というよりも、常宿という方があたっていたであろう。ずっと継続して寝泊まりするというより、居場所がなくなったり、困ったりした時に世話になる形の宿であった。その居候スタイルは、その後長年にわたってつづけられる。

韓が常宿とした部屋は、1階のミルクホール脇の狭いところであった。どんな狭い部屋であれ、困ったときに転がりこめる避難場所ができたことは、彼にとって大きな安心材料であった。それに

彼にとって後に大きな財産になるのは、ここでの日本語の訓練もさることながら、伊藤の家に入出入りする多くの人たちと知り合い、交際するようになることであった。よく出入りした人物には、伊福部輝隆、高津正道、島田清次郎、秋田雨雀、エロシェンコらがいた。葉山事件の刑期を終えて出獄したばかりの神近市子が訪ねてきたのもよく覚えている。その中でとくに伊福部と親しくなるが、伊福部と同じように韓自身もある時期はアナキズムに親近感を抱くほどになる。

なおその頃伊藤証信・あさ子夫婦を助けていた人物に、武藤叟を名のっていた武藤仁叟がいた。渡辺海旭の弟子でもあるが、当時は無我苑の事務長格であった。のちにフランスに渡るが、望月百合子に恋愛感情を抱くなど、伊藤が間に入って多少やりとりがあった。しかし、2人の関係は結局何事もなかったかのように終わってしまった。

## 2

伊藤の下に居候しだしてから、韓は正則英語学校に通いだした。さらに1920年4月からは、明治学院高等部にも聴講にでかけるようになった。ライシャワー元駐日アメリカ大使の父が、高等部の部長はやめた直後であったが、宣教師として教えていた。韓はそのランシャワーにも随分世話になった。

日本の事情がわかりだすこの頃から少しずつ韓の生活が変わりはじめた。日本、あるいは在日朝鮮人の社会運動に関係しだすからである。

彼が社会主義や社会運動に傾斜するようになるには、加藤一夫との交流が一番大きく与っていた。加藤との交流は、韓が東中野の加藤の家を訪ねたことから始まる。加藤には、著作を通じて日本に来る前から憧れており、日本に渡ったら必ず会いたいと思っていた。当時加藤はトルストイ全集を手がけたトルストイアンとしても、民衆芸術の主唱者としても、すでに著名であったが、丁度その頃は、社会主義にも接近しつつあった。加藤は伊藤証信とも交流があり、精神運動社の講演活動や『精神運動』への寄稿でも協力していた。そのため一層加藤を身近かに感じるようになって、何とか訪ねてみたいと思い続けた。ついに1920年の夏頃、東中野の加藤宅を訪ねてみた。

加藤は、いわば著名人であり、売れっ子であった。しかし初対面の若い一朝鮮人に対しても、尊大ぶるところも、迷惑がるところもみせなかった。むしろ丁重で腰の低い応待ぶりであった。それでいて強烈な個性、自信あふれる言動には、韓は圧倒されるものを感じた。

それからは、加藤の人間にも思想にも魅かれ、加藤につづいて韓自身も社会主義に傾斜するほどになった。加藤も発起人の1人となった社会主義同盟にも加入した。その同盟への加入を機に、堺利彦らの他、近藤憲二らアナキストとも知りあうようになった。そのため、警視庁の社会主義者のリストにも載り、要視察人になってしまった。なお、のちに朴烈らの不逞社等にも、加藤は講師に応じてくれたり、加藤と朝鮮人アナキスト・グループの関係はしばらくつづくことになる。

このように、在日朝鮮人の団体や活動に本格的にかかわる前に、日本の社会運動団体に加入することから韓の社会的活動がはじまったことになる。しかしまだこの段階では、社会主義には理念的な共感を覚える程度で、それにうちこむほどの理解や意識をもっていたわけではなかった。キリスト教の教会にも相変わらず出入りしていた。生活も不安定で、日本での足場も強固なものではなかった。まだ不安定な感いの日々は続くのである。

3

こんな時、韓にとっては、自らの人生を変えるような話が舞いこんだ。朝鮮のキリスト教の牧師から、伝道活動に1年協力してくれたら、アメリカに留学させてやるという話であった。韓はその提案に応じた。1921年夏のことである。

もともと祖国で生活し活動できれば一番よいと思っていたのだが、夢の多い韓には、それが不可能であった。そのため、日本に渡っていたのであった。それだけに、多少悩み考えはしたが、帰国する道を選んだ。その年の9月に、日本での生活の整理をつけると、いったん帰国した。

郷里に戻って朝鮮で再開する生活の準備をした後、牧師との約束に従って、伝道活動に入った。伝道地区は、京城の北に位置する江原道洪川であった。

ところが、韓は、招いてくれた牧師とはどうも考えがあわなかった。当時は朝鮮の牧師はプライドの高い人が多かったが、とくにその牧師は若者に議論をしかけられると、怒りだすことがよくあった。とうとうある時、その牧師と韓の議論が相容れなくなり、牧師の怒りをかうこととなった。その結果、韓は洪川の教会を追われる羽目になった。アメリカ留学どころか、朝鮮でも生活がたたなくなつたのである。

それからしばし浪人生活となるが、ほどなくつてを頼って、郷里に近い木浦に行った。

木浦は朝鮮最南端に近い、きれいな港町である。そのミッション・スクールの教員に雇われる口約束をもらって出かけたものであった。町に着いても、すぐには雇われなかったのも、しばらくその自然や風物を楽しんでいた。

ところが、いつになっても、そのミッション・スクールから採用の連絡が来なかった。学校側がいうには、その地区の教育庁が教員の許可証を発行してくれないからということであった。

それから調べてようやくわかったことは、日本の警視庁から木浦に自分にかんする社会主義者としての要視察人の通報が入っていたことである。韓としてはうかつであったが、日本の警察は決して甘くはなかったのである。おまけに、木浦のある名望家に、思想上の理由で、「君が木浦にいるのはまずい。ましてや学校などに就職したら、迷惑をうける人がでてくる、だからできるだけ早く町を退去するように勧告してほしいと警察署長から頼まれている」旨通告された。当時は、朝鮮人にとっても、日本にいるよりも、朝鮮にいる方が弾圧がきびしく、運動はしにくかったが、それを

よく教えられる思いであった。

かくして木浦のみか、日本の支配が続く限り、朝鮮には居場所がないと考えた韓は、仕方なく、  
またも日本に渡り、生活をたて直す決意をしいられるのである。

### 3 2度目の日本、そして社会運動へ——1922~1925年——

#### 1

韓現相が再来日したのは、1922年春であった。この時も単身であった。

東京に着くなり、東中野塔の山に移っていた伊藤証信を訪ねた。仕事や住居をみつけるまで、再度の居候を申込んだところ、あさ子夫人が気持よく受入れてくれた。

しばらく定職はなく過すが、その年の暮れになってようやく継続的な仕事にありつけた。伊藤の協力者で、伊藤宅にもよく出入りしていた『第三帝国』の石田友治が下中弥三郎を紹介してくれたので、ある日、下中を訪ねた。すると、下中が即座に平凡社の仕事を提供してくれたのである。

その頃、平凡社は手狭だったため、西大久保の下中家の他、表神保町の東京堂裏にあった旅館を借りて編集業務をやっていた。かつて石田友治が『文化運動』刊行等で使っていたところで、震災直前の1923年8月には、平凡社本社になるところである。仕事は、そこでの手伝いから始まった。住居も、韓が伊藤宅中心にあちこちに居候している状態を聞くと、下中は西大久保の自宅でもあった平凡社社屋で寝泊まりすることを許してくれた。そこには、下中の秘書的な仕事をしていた内山泰助も寝泊りしており、男性2人の自炊生活となった。

この2度目の来日のときも、すぐに社会運動とのつながりができた。加藤一夫の自由人連盟に加入したり、堺利彦らの集会にも顔を出したりした。もっとも今回は、前回とちがって日本人グループよりも、むしろ在日朝鮮人グループとのつながりの方が強くなっていく。

#### 2

このようにして1922年に、再び日本の土を踏んでみると、初めて来日した2年前とちがって在日朝鮮人の運動は、大分様相を異にしていた。

もっとも大きな変化に思えたのは、かつて優勢であった民族主義(独立)運動的性格のものより、民族運動を超える思想運動・解放運動が主流になっていたことである。最初の来日の折にはまだ日本にはいなかった朴烈(朴準植)も、日本に入国して活動していた。その頃目立つ活動をしていたのは黒壽会であったが、朴烈はその中心人物の1人になっていた。

黒壽会には、アナキストも、マルクス主義者も、あるいはヒューマニストも入っていた。雑多な在日朝鮮人による組織であった。朴烈が在日朝鮮人に大きな影響力をもつにいたるのは、いわゆる



「信濃川虐殺事件」や「新潟事件」とよばれる事件を契機にしてであった。

信濃川虐殺事件が発覚したのは、1922年7月。新潟県十日町の山中にある信越電力株式会社の工事現場で、朝鮮人労働者が残虐な処遇をうけた上、虐殺されるものも多数であった事件であった。逃亡して山を下りた朝鮮人労働者の訴えにより、読売新聞が報道するに及んで明るみにされたものである。

この虐待・虐殺の事実を知った在日朝鮮人諸団体は一せいに抗議に立上った。その中から、アナ・ボル、あるいは民族派や思想運動派を問わず、現地調査員が5人選ばれ、現地調査に赴くことになった。しかし警察の弾圧もきびしかった。結局アナキズム系の朴烈以外の他派のものは、弾圧から身の危険を感じて調査員を辞退してしまった。そのため、調査員は朴烈ただ1人となるが、朴烈は調査行を決意。単身で十日町に出かけた。そこに、日本人として調査にきていたのが、中浜哲であった。中浜は朴烈と同じアナキズム系に属し、のちにギロチン社事件にかかわって死刑になる人物である。詩人でもあったが、当時は自由労働者同盟に拠っていた。朴烈と中浜はこの十日町で相知るようになったものである。

朴烈は苦勞してある程度調査をなすとげた。その報告書をもって帰京。それによって、朝鮮人グループの間では朴の人氣がさらに高まった。8月に入って、朴はその資料をもって朝鮮に帰国し、真相を民族主義団体など社会運動グループに報告した。

9月7日には、神田美土代町の神田青年会館で朴烈と中浜の調査報告を兼ねた信濃川虐殺事件の演説会が開催された。当日は朴烈が話したすと、すぐに中止、さらに解散を命じられた。その上、中浜ら多数の参会者が検挙された。

このような推移の下で、朝鮮人グループの中における朴烈の人氣は本ものとなり、黒壽会における彼の存在もますます大きなものになっていった。黒壽会の事務所も、機関紙『黒壽』の発行所も朴烈宅におかれ、彼のリーダーシップが確立する。

その朴烈は、当時在日朝鮮人活動家のつねで、収入に限られ、苦しい生活をしてきた。そのため、食事もロクにとれず、やせていた。それでいて、運動のためには、立場をはっきりさせる人物で、頭の回転もシャープで、実行力もあった。金子文子との関係では、韓の印象では文子の方が朴にははれぬいている感じであった。

朴烈のリーダーシップが確立したとはいえ、雑多な会員からなる黒壽会を完全に一本化することは到底困難であった。実際に朴烈といえどもすべてを自分の方針通りに動かすことは不可能であった。というより、朴烈の立場・指導が明確になればなるほど、離反を強めるものもでてきた。結局、黒壽会は分解し、アナキズム系は黒友会、ボルシェヴィズム系は北星会や一月会、キリスト教系は主に民族主義グループにわかれていく。朴烈らは、黒友会の『民衆運動』とは別に、『不逞鮮人』を刊行しはじめ、1923年に入ると不逞社も組織した。韓は朴烈らアナキスト系に親近感を抱いていたので、そのグループの黒友会に属した。

韓が黒友会に加入したのは、1923年3月であった。朴烈とはじめて個人的に知りあうようになってからである。それまでも、朴烈とは集会等では時々顔をあわせていた。伊藤証信の無我苑にも朴烈は訪ねてきたことがあった。ただ個別的に話しあうようになるのは、朴が文子と2人で西大久保の平凡社を訪ねてきたときが最初であった。それからは、韓もひんばんに朴や黒友会のグループと付きあうようになっていく。

3

韓が在日朝鮮人のアナキズム系の運動に深く関係しだした頃、まったく予想もできなかった大事件が勃発する。自らの人生も、同胞の人生も180度転換させられるほどの大事件であった。いうまでもなく、関東大震災の襲来である。

1923(大正12)年9月1日、在日朝鮮人にとっては大きな不幸をまき起こす大地震が関東一円を襲う。韓は神田神保町の平凡社でこの地震に遭遇した。その瞬間から大恐慌状態が始まった。しばらくは揺れがひどく、立っていることもできない状態で、何から手をつけていいか、どういう行動をとったらいいのかも、すぐには思い浮ばないほどであった。ともかく大急ぎで仕事や地震による被害を片づけて、様子を見ることにした。地震はいったん落ちついたが、余震の心配は残りつづけた。しかしいつまでも平凡社に残っていても仕方がないので、西大久保に戻ることにした。

道中は混乱していた。あちこちで煙や火の手があがっていた。被災状況も思ったよりひどかった。交通機関も途絶して、道路状況も混乱していた。行きかう人に状況を聞いても、みんな混乱しており、正確な情報・判断は得られなかった。ただ1人で歩きつづけるのも不安な状態であった。

ところが、靖国神社で同郷の金敏奎・三奎兄弟に会った。そのため、大勢避難していた境内にいったんとどまり、様子を見ることにした。結局その夜は同神社境内に過ごさざるをえなくなった。まだ時折余震が発生している上、まわりが広場で安全、かつ大勢人がいることで、安心感を与えられたからである。翌9月2日早朝、3人で靖国神社を発って、牛込の石田友治を慰問し、朝食を御馳走になってから、東中野の伊藤証信のもとに向かった。被災状況を見つづ、また倒壊物や危険な道を避けつつ歩いたので、無我苑に着いたのは、午後3時近くであった。

伊藤夫妻はじめ、みんな元気なので、ほっとするが、それと同時に、前夜からの疲れもどっと出てきた。靖国神社では、野外でもあり、遠く近くの火災が目に入ったり、時には爆発音まで聞えてきて、ロクに眠ることができなかった上、友人・知人に会うまでは不安も脳裡を去らないでいた。無我苑に着いて一安心できたので、一先ず居間で休ませてもらうことにした。

その頃はまだ朝鮮人や社会主義者に対する襲撃・虐殺が本格化する前であったが、すでにいろいろの噂・流言が飛びかっていたらしい。しかし韓はほとんど気にもしていなかった。ところが、昼寝をしている最中、あさ子夫人が起しにやってきた。そして朝鮮人にかんする穏やかならぬ噂が飛

んでいること、この場所も安全とはいえぬことを告げ、いったん他所へ逃げるように注意してくれた。

伊藤証信も心配し、朝鮮人が隠れていても疑われそうもない場所として、無我愛運動の理解者でもあった江渡狄嶺宅をあげ、紹介状も書いてくれた。

早速それをもって韓は金兄弟と一緒に甲州街道を徒歩で浜田山に出て、江渡宅を訪ねた。韓は、まだこの頃にいたっても「不逞鮮人」問題を深刻にうけとめてはいなかった。万一ということで避難する程度にしか考えていなかった。無数の同胞のいわれのない受難を知り、事態が只事でないことを認識するようになるのは、もう少したってからである。

江渡に会うと、紹介状があったので、気持よくうけ入れてくれた。もっとも江渡なら、特別の紹介なしにも隠まってくれる人物であることもやがて教えられるが、伊藤の紹介があったので、一層簡単にうけ入れてもらえたのであった。結局3人でそれから1か月近く江渡宅に隠まわれることになった。

その間、あまり長逗留では迷惑だろうと思う気持と、次第に世情も落ちついてきたので、もう東京市内に戻っても大丈夫だろうという気持の両方から、江渡にいとま乞いを申出ると、江渡はまだ不安が残るからと、市内に戻るのに賛成してくれなかった。それほどに、江渡は韓らの身を本心から心配してくれていたのであった。

しかし、さすがに1カ月もたつと、韓らが東京市内に戻りたいという気持の表明に、江渡も反対しなくなった。

4

10月1日、韓らは江渡宅を辞し、東京市内に入った。まだ戒厳令下にあったが、さすがにこの頃には、特別身に危険を感じることはなかった。勤務先の平凡社は焼失して一時的に大阪に移転していた。その他気になることが多く、あわただしく1か月の空白をうめるべく走りまわった。

その日、そんな用務の合い間に、新聞界では著名だった碧川企救男を小石川に訪ねた。彼に9月以降の事態を話すと、彼は遭難記のようなものを書くようにすすめてくれた。そこで、200字6～8枚位の短かいものだったが、書き上げて渡した。

それを読んだ碧川は、東京日日新聞の松内則信を紹介してくれ、会うようにすすめてくれた。それから韓はその小稿をもって東京日日新聞社に向かった。小石川から日比谷の日日までの途次、とくに呉服橋あたりでは、まだ相当の数の死体が処理されずに放置されたままなので驚いた。日比谷一帯は焼野原同然で、日日の建物の周辺も焼けただれていた。

社会部長も経験したベテランの松内は碧川の紹介ということで歓待してくれた。いろいろ話もした。しかし最終的にその原稿は採用とならず、発表することはできなかった。後日、それを碧川に

報告すると、「そうだろうな。今の日本では無理だな」と合点していた。

江渡宅を辞して市内に入ってから、神宮外苑に仮設されたYMCAのキャンプで夜を過した。そこに入ってから2日目の10月2日だったと韓は記憶しているが、三枝という警視庁内鮮課の刑事が韓の居場所を探りあててやってきた。韓をみつけるなり、長い間探すのに苦労したあとのせいか、余程うれしかったらしく、「やあここにいたのか。よかったよかった」といかにも保護でもしてやるといわんばかりの調子で声をかけてきた。三枝は、韓の居場所を知っていた石田友治夫人にうまくかまをかけて聞きだして探しに来たのであった。

警視庁が韓を追っていたのは、彼が江渡宅に隠れている間に一大事件が惹起され、その取調べが進行していたことにかかわっていた。いわゆる「朴烈事件」である。その事件の関係者とされた朴烈・金子文子夫妻、栗原一夫らはほとんどが逮捕されていたが、韓の所在だけは警視庁もつかめず、躍起になって探していたのであった。

韓は左門町の四ツ谷署に連行された。最初は逮捕理由もわからなかったが、10月に、朴烈、金子、金重漢、張詳重(張讚寿)、新山初代らとともに、秘密結社(不逞社)・秘密出版の罪で起訴され、予審にかけられた。そしてそのまま12月まで、その留置場におかれ、朴烈らの取調べがすすんだ後、富久町の東京刑務所の未決に移された。12月のある日、たまたま隣房に朴烈がいることがわかった。それからは壁を通してお互いの無事を確認する通信を度々かわしあった。

取調べがすすむうちに、自分が朴烈らの事件とは切りはなされていることがわかった。朴烈らは大逆罪と爆発物取締罰則違反を問われていたが、検察当局としても韓らをそれに結びつけることは無理だったのである。それでも朴らの大逆事件の調べが終るまで、足どめをくう結果になった。

ところが、1924年6月、朝鮮に残してきた母が亡くなった。そのため、突然保釈になった。保釈になるや、母の供養の前に、すぐに朴烈ら入獄者に差入れの弁当を入れた。当時20銭の弁当であった。みんなに保釈になったことを知らせ、事件のひろがりなども推測できるようにするためであった。

やがて、韓は張詳重らとともに、証拠不十分で予審免除になり、自由の身になる。しかし朴烈らの裁判もあり、勝手な動きはとれなかった。また時代も社会運動にとって不利な状況に変わりつつあり、アナキズム運動、朝鮮民族・解放運動もだんだんむずかしくなっていく。

かくして大震災、そして朴烈事件による逮捕、しばらくしてからの釈放後、韓の生活は従来とは大きく変わったものになっていく。

4 社会運動からの離反と白十字時代——1925～1945年——

1

前述のような事情で1924(大正13)年6月、韓が保釈で市ヶ谷刑務所を出てみると、在日朝鮮人の運動は大きく変わっていた。大震災、そして朴烈事件を機に、当局の抑圧は一層強まっている感じであった。その中では、日本では人間としての権利も認められていなかったこともあって、アナキズム系がなお主流を占めていた。韓も仲間たちがなお獄につながれている上、しばらくは尾行につきまといられるので、表立った動きがとりにくかった。それでも、時々留学生たちと会合をもったり、隠れて活動は続けた。

このように次第に暗い方向に時代状況が動く中でも、転向こそしなかったが、暮しもたてなくてはならず、ことに祖国に残していた妻を呼びよせる必要もあって、従来以上に生活のことを真剣に考えざるをえなくなっていた。平凡社での宛名書き程度の仕事では不安定で、不十分であった。そんな気持ちもあって急いで、仕事を探してみると、ほどなく新しい仕事口が見つかった。白十字会の事務職であった。

日本に来て、社会運動に身を入れるようになってからも、賀川豊彦らの影響も受けつづけ、伝道師になる夢も捨てきれずに持ちつづけていた。そのため、キリスト教関係者とのつながりも切れずに維持されていた。そのうちの1人に新公堂神学院の富永徳磨師がいた。その富永の紹介で神田猿楽町17番地の白十字会に雇われることになったものである。

白十字会は結核予防や社会事業を活動内容としていた。そこで韓に用意された仕事は事務全般であったが、本部主事の林止(とどむ)に認められ、以降1939年までのおよそ15年間勤務することになる。

1926年頃から1930年前後にかけて、韓は新公堂神学院の夜学にも通うが、富永徳磨にきびしく鍛えられ、信仰の道と、白十字での社会事業や結核問題に真剣に取りくむ生き方に全力を注ぐことになる。

1926年3月25日、朴烈と金子文子に対する判決が下され、2人は死刑を言いわたされる。韓は、この時にはすでに白十字に勤務しており、仕事にもほぼ慣れた頃であった。韓にとってはもちろん、朴烈らにとっても身に覚えのないデッチ上げに近い事件であっただけに、韓は朴烈らに同情を禁じえなかった。もっとも、判決から10日後に、朴と金子は無期懲役に減刑される。そのため死刑を免れて、長い刑務所生活を強いられるが、のちに、まだ千葉刑務所にいた朴烈のところに、韓は妻をつれて面会に出かけたこともあった。

2

その後、時代は戦争に向けてどんどん悪化していく。在日朝鮮人の主体的な活動の場はどんどん縮小されていく。韓の生活も白十字とキリスト教会の活動に狭められていく。昔の同志とは、交流は続けるが、社会運動で一緒になることはなくなっていく。朝鮮人の地位や暮らしも、一般的には急速に悪化していくのだが、運動を通しての抵抗はむしろかしくなっていく。

1939年、大陸での戦火の拡大にともなう総動員体制下に入ってもなく、韓は白十字を退職する。15年も勤めてみると、白十字の事務系ではトップの地位に上っていたが、内部的な軋轢も増大していた。そんなことに嫌気をさしていた時でもあり、賀川豊彦中心に建築ギルドの話がもち上ると、白十字の方は村島婦之に託して、その仕事に参加することにした。

同ギルドは住宅の建て売りをする団体で、その設立に際しては、韓も発起人の1人となった。それ以降、結局第2次世界大戦の終了まで、そこで働くことになる。

5 第2次大戦後の時代——在日韓国人として——

1

1945年8月15日、ついに戦争が終った。韓は、戦争の勝ち負けよりも、自分たちを在日朝鮮人にも解放の時代が始まろうとしている新鮮な息吹きを感じとることができてうれしかった。10月に入ると、新聞に政治犯釈放の記事がでた。それをみて朴烈のことがすぐ念頭に浮かんだ。韓は張詳重と朴烈も釈放されるにちがいない、迎えに行こうと話した。2人は話しあうや、すぐに仕度をし、上野から秋田に向かった。

韓たちにとっては、それほど戦後の空気は新しい時代、何でも自由にふるまえ、望ましいことが実現できそうに思える時代にうつっていた。政治犯の処遇についてきちんと事前に調べることもせず、ともかく秋田に向かったのも、そんな気分からであった。

秋田に着くや、川尻の刑務所にむかった。時代が時代だけに、突然来訪した2人の朝鮮人にも所長は面会に応じた。ただ朴烈との面会は規則上親戚以外のものではないこと、朴烈がいつ保釈になるかは全くわからないことをくり返し、許可しなかった。それに対して、張詳重が怒り出し、大声で所長にくっつかかると、所長も困った様子で、妥協案を出してきた。自分の責任で面会は認めるが、朴烈に新しい時流や釈放の可能性などを一切話さないことを条件としてほしいというのであった。所長としては、朴烈の処遇に困っているときで、下手に朴烈を刺激したくないという気持ちをもつのは当然であった。韓と張もそれ以上は頑張らず、所長の提案をうけ入れた。

面会は所長室で行われることになった。所長もどのように面会させるべきか思案したのであろう

## 一在日韓国人の軌跡

が、自分の部屋で自分も立ちあって面会させる方法をとった。

所長室に朴烈が入ってきたときは、さすがに感動的であった。朴烈も予想もしなかった訪問者との面会に、一瞬驚いているようであった。考えてみれば、20年ぶりの対面である。どちらもどこから話していいかとまどう状態であった。しばらくは、とくに朴烈は、感情が激して十分話がでてこぬ状態が続いた。韓らも所長との約束もあり、現状にかんする話、あるいは朴の保釈にかんする憶測的な話は、朴を刺激させかねず、ちゅうちょさせられた。その間、所長がとってくれたウナ重を4人で食べながらの話しあいとなった。そうこうして、1時間もすると、話が途絶えがちになった。

そこで辞去することにするが、別れにあたって、張が朴烈と握手しながら、「また来るよ」というようなことをいった。そのとき所長の顔をみると、大分あわてた様子であった。一時間の会見中も、所長は余分な情報を朴烈に伝えてくれないようにと、相当心配気に3人の話を聞いていたが、韓と張が約束を守ってくれたので、ほっとしていたところへ、最後の挨拶にちょっと緊張したようであった。しかし張も「また来るよ」といっただけで、それ以上話を続けなかったため、所長もほっとしていた。

しかし、朴烈も、張の自信ありげに「また来るよ」といういい方やそれ以前は考えられなかった所長室での会見に、事情が変わりつつあることを察したようであった。

韓たちが帰京してすぐであったが、10月15、16の両日、日比谷公会堂で朝鮮人連盟の結成式が挙行された。韓らがそこに出席して朴烈の様子を報告したところ、すぐに釈放もされないでいることに多くの出席者が激高。会終了後、隣の日比谷署に抗議のデモをかけたほどであった。

そんなことも与って、朴烈の釈放が急速に実現することになった。そこで、韓は、10月20日過ぎと記憶しているが、また張詳重と2人で秋田に向かうことになった。今度ははっきりと朴烈を出迎えるための秋田行であった。

10月27日朝、秋田刑務所には朝鮮人連盟秋田県本部から丁遠鎮らも出迎えに来ていた。8時半頃、韓が身元引受人となって、朴烈は出獄することになった。22年ぶりの自由の身であった。彼らは進駐軍宿舎と秋田魁新報社に挨拶にまわった後、いったん汽車で大館にむかい、丁遠鎮宅に到着した。

## 2

朴烈の出獄、そして帰京は、在日朝鮮人から嵐のような歓呼をもって迎えられた。出獄直後は決してそうではなかったが、各所でもてはやされるにつれて、朴烈も英雄のようにふるまうほどになった。もっとも朝鮮人連盟は共産党系のグループの指導下にあったので、そこでは朴烈もさして重要な活動の場を与えられなかった。

1946年2月、朴烈らは連盟と袂をわかった。4月にいたり、新たに新朝鮮建設同盟を結成した。

この結成時は、たまたま父の死去で、韓は帰国していた。そのため、とくに役職などにつくことはなかった。

しばらくして日本に再上陸すると、韓は朴烈に新朝鮮建設同盟で何か指導的地位につくようすすめられた。しかし朴烈の取まきがだんだん指導者気取り・英雄気どりでおかしくなっていたので、新同盟では地位を求める気にはなれなかった。

それにしても、戦前とはちがった新しい時代がはじまっていたことは、まちがいがなかった。韓はあせることも、あわてることもないと考えた。自分のとるべき道をゆっくり考えようと思った。

### おわりに

今回は、韓にとって、また在日朝鮮人にとって「解放」を告げることになる終戦とその直後の時期までで筆をおきたい。ただ在日朝鮮人にとって、第2次世界大戦の終了は、自由や幸福をもたらすものでも、真の解放を意味するものでもなかったことが次第に明らかになっていく。

朴烈は、朝鮮戦争勃発後、北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)に移り、思想宣伝のスポークスマンをひきうけるにいたる。そして次第に韓国・朝鮮の同胞からも忘れられ、戦後すぐの英雄的処遇は過去のものになっていく。

韓も、他の在日韓国・朝鮮人も、ほどなく戦前と同じように再び差別された環境・条件の下での生活を強いられることになる。もちろん戦前とは状況が大きく変わったことは否定できない。しかし、反面で水面下に沈んだところで新しい差別や排除が日常化する。差別する側の日本人が、意識することなく差別を潜在化するところに、むしろ解決のむずかしい状況が現出するようになる。第2次世界大戦前と戦中の彼らの犠牲、そしてその後の平和と民主主義の到来は、在日韓国・朝鮮人たちにとって一体何であったのか。韓ならずともそう自問せざるをえないはずである。

戦後40年。韓からも、在日韓国人・朝鮮人たちからも苦悩は消えていない。在日韓国人・朝鮮人の苦悩をいかに解決するか、彼らに負わされた差別や不平等をいかに克服するか。それは、日本人自身の問題でもあり、日本人も応えなくてはならない問題である。なぜならば、彼らの苦悩には、日本人こそ責任があるからである。国際交流は足下から出発せねばならないが、在日韓国人・朝鮮人の現状、彼らに対する差別や指紋押捺などの実情をみれば、日本人はその第一歩からつまづかねばならないのが現状であることを教えられるであろう。

(経済学部教授)